

Dee Brown; *Bury My Heart
at Wounded Knee*

平野 信行

ベストセラーかならずしも良書ならず、というのが世間の通り相場のようなのだが、50 週以上もベストセラー・リストの上位を下らないとなれば、その書物にはそうなるだけの何らかの価値があるに違いない。一口に 50 週というが、考えてみると、これはほぼ一年に等しい。特定の本が一年以上も声価を維持し続けるというのはたいへんなことで、ほとんど例を見ないことではなかろうか。ここにとりあげた Dee Brown の著書はそのたいへんな書物である。なにしろ、1971 年 1 月に Holt, Rinehart & Winston から初版が出て以来、同年 10 月までに版を重ねること 10 度以上、その間 Book of the Month Club, Playboy Book Club 他の Book Clubs の選定図書に入るなどして、1972 年 4 月まで、ほとんどベストセラー・リストの首位を譲らなかったのだから、本書がいかに読者大衆にアピールしたか想像に難くない。

Wounded Knee は、South Dakota 州 Pine Ridge の東に水源を持ち、北北西に流れて Big White River に合流する川であり、この川の沿岸で、アメリカ西部史上の一大汚点、Wounded Knee の大虐殺が行なわれた。しかし、この戦闘について書くのが本書の目的ではなく、著者の狙いは、コロンブスのアメリカ発見に端を発する「アメリカ」インディアンの苦難の歴史をインディアンの立場に立って再構成しようという、きわめてスケールの大きな、野心的労作であり、Wounded Knee の事件は、本書の最終章に締めくくりとして扱われている。これまでアメリカ・インディアンについては数多く語られてきたが、彼らの立場に立って観ているものは皆無に等しく、それだけに Dee Brown の新著は、類書のなかにあってユニークな存在となっている。

本書の価値はいろいろの点に見出されるが、その一つは、執筆に際しての著者の準備が周到を極めていることにある。彼はインディアンと親交があって、彼らの流血の悲劇を直接聞くことができた、という個人的に有利な条件は別として、過去にインディアンとアメリカ騎兵隊の交戦があった土地へ出かけて、資料を蒐集したり、単行本や雑誌論文はもとより、アメリカ議会の議事録にまで丹念に眼を通す、といったじつに細かな気の配りかたをしているのである。その結果はとうぜんきわめて高い実証性となって現われる。本書が一年以上もベストセラーのランクにあった理由の一つは、おそらく、このような著者の誠実な態度が読者から好感をもって迎えられたからに相違ない。

映画、演劇、小説など、われわれは、さまざまな材料を通してインディアンについて知ることができるが、それらは彼らのなまの姿ではなく、大なり小なり偏差が生じた形でわ

れわれに伝えられたものであり、その結果は善悪の截然とした区別となって現われることになる。すなわち、白人は善、インディアンは悪、したがってインディアンを討伐する白人は英雄なのである。映画や小説はいわばフィクションであるから、ある程度はこうした一方的な観点も許容されるかもしれない。しかし、これが歴史の記述にまで持ち込まれるとなると、事は重大だ。ところが、実情はそうなっていて、いままで眼に触れたかぎり、公平な記述はまったく見当たらない。もちろん、ただ触れておく程度の当り障りのない書きかたは見つかるが、それはこの際問題外である。大多数は、インディアンが開拓部落を襲ったので、開拓民はやむなく武器をとって相手になった云々といった調子で、なぜ彼らが開拓部落を襲わねばならなかったかという点にはほとんど触れていない。一方、インディアンは白人をどうみていたかということになると、残念ながら、これについてはほとんど知られていない。断片的にはあるが、一冊の本にまとまったものは、出版してくれところがなかったことも手伝って、まことに寥寥たるものでしかない。こうした状態のところへ、Dee Brown は本書をもって痛烈な一撃を浴びせた。この書物によって、いままで一方的にしか伝えられなかったインディアンに関する事柄に、はじめて公平な光が当てられたと言って差し支えない。

公平を期するためであろう、著者は主観的な記述を極力避けるように努めている。すでに触れたように、著者はできるかぎり直接資料に当たっているが、そのなかには、インディアン自身の残した記録、たとえば、Sitting Bull や Jeronimo などの語ったこと、あるいは、Wounded Knee 事件生き残りのインディアンの証言などが積極的にとり入れられているのである。しかも、著者はそれらに一

定の価値評価を与えてはいない。いわば、彼は白人とインディアンの残した記録に事実を語らせているのだ。その意味では、本書は白人とインディアンに関する貴重な記録集と言うこともできる。そのうえ、記録を集めたものはとかく無味乾燥になり勝ちなのを、本書にはその欠点がなく、読み物としても第一級であることは特筆に値すると思う。

著者は本文では主観を交えることを極力避けているかわりに、序文と本書のために挿入した一枚の地図、および *an American Indian Portrait Gallery* という写真集によって、彼の姿勢を明確にうち出している。たとえば、序文は2ページ半の短いものながら、そのなかには、1860年から1890年までは *an incredible era of violence, greed, audacity, sentimentality, undirected exuberance, and an almost reverential attitude toward the ideal of personal freedom for those who already had it.* というような注目すべき指摘がなされているが、この中で *almost reverential attitude* 以下の件は、従来アメリカ史においてインディアンを扱う場合に欠落していた観点である。*reverential* という単語は何気なく読めばそれまでだが、本書を読み終わった後にこの部分を読むと、著者の背一杯の皮肉を感じるのである。アメリカ「開拓」という美名のもとにとられた行為は、個人の自由の飽くなき追求であり、そのかわりに、インディアンの自由が奪われたのだ。著者はその発端をコロンブスのアメリカ発見に求める。これが本書の第一章である。タイトルは *"Their Manners are Decorous and Praiseworthy"* となっているが、じつは、これはコロンブスがスペイン国王と女王にした報告のなかにある言葉で、注意すべきことは、この言葉に含まれている彼のカリブ土人（彼はインディオスと名付けた）に対する見かたで

ある。*decorous* も *praiseworthy* も、ここでは本来の誉め言葉ではない。コロンブスが国王に伝えようとしたのは、カリブ土人は、おとなしく言うことをきくから、使いやすいということなのである。インディオスと友好的な関係を結ぶことなどは彼の念頭になかったのだ。こうして端緒が開かれた後、ヨーロッパ人が続々とアメリカ大陸に足を踏み入れることになったが、彼らのとった態度はみなコロンブスに近かった、というのが著者の観点である。彼は白人とインディアンの長い抗争の歴史から主要な事件をとり出しながら、それらの実態を精確に描き出している。一例を挙げると、*"The Long Walk of the Navahos"* と題された第二章で、酋長 *Manuerito* に率いられたナバホ族が、はるか遠くの居留地に向けて旅させられる「死の旅」を扱っているが、この事件は記録としては残っているものの、事実についてはほとんど語られていないだけに、興味深いところである。この章を読むと、インディアンの保護の目的で設けられたとされる居留地なるものが、形ばかりのまやかしであり、保護されるどころか、じつに悲惨な生活を送らされていたことがわかるのである。そのことを図で示してくれているのが、前に触れた一枚の地図である。この地図は *The American West. 1865~1890* で、インディアンとの交戦地と騎兵隊の砦の配置を示しているが、これを見てまず驚くのは砦の数が多いことである。40以上の砦がインディアンの土地を包囲するように設けられている。これでは、たとえ居留地が比較的好条件に恵まれていたとしても、監視付きの生活を強いられているようなもので、居留地の実態がおおよそ想像つこうというものだ。現実には、彼らはそれぞれの居留地において監督官の指導下に置かれていたのだから、いわば、彼らは二重の監視を受けていたわけであ

る。居留地の生活条件は悪く、土地は不毛で作物は実らず、彼らは生きるためにしばしば居留地を出た。これは合衆国政府から反逆と受けとられ、インディアン討伐ということにつながった。その過程で流血の惨事を繰り返したわけだが、なかでもっとも有名な事件が、カスター将軍 (George Armstrong Custer) 指揮下のアメリカ第七騎兵隊が全滅した Little Big Horn の戦いである。この戦闘については、映画や小説でさまざまな描きかたがされているが、その大部分はカスターを悲劇の将軍に仕立てている。だが、はたしてそうだったのか？ Dee Brown は本書ではそれほど詳細に伝えていないが、これより7年ほど前に著した *Showdown at Little Big Horn* という書物で、この事件の全体をみごとに描き出している。この本は、1876年5月11日から同年6月28日までの約1カ月半の間の第七騎兵隊と Crazy Horse に率いられたスー族とシャイアン族連合軍の両方から、時間の推移に応じて主要な人物を選び出し、その人物のとった行動、処置の詳細を追いながら、この歴史的な事件の全貌を明らかにしようと試みたものである。このなかで Custer に焦点を合わせた部分と Crazy Horse や Sitting Bull を中心に記述した箇所を比較しながら読むと、第七騎兵隊の全滅は必然の結果であり、Custer はみずからの責任で悲劇の道を選んだのだということがはっきりわかる。

この事件のあとに Sitting Bull の死があり、続いて起こったのが Wounded Knee の大虐殺であったから、これにアメリカ政府の報復的意図があったことは間違いない。ところが、伝えられている「事実」は、この事件はインディアン側の発砲から起こった、インディアンが挑発したのだ、ということになっている。はたしてそうだろうか？ 幸い、この疑問に答えてくれる生き証人がいる。そ

れは酋長 Crazy Horse の甥にあたる Red Fox で、百歳を越えてなお健在の彼が、*The Memoirs of Chief Red Fox* という回想録を出したのである。このなかで、白人の伝える「事実」とはまったく異なる事実が語られている。ついでながら、この書物はきわめて抑制された淡々とした調子で書かれており、著者の気負いや白人に対する悪罵はすこしもない。それだけに、Red Fox の内に秘めた苦悩が行間から滲み出てくるようで、読み終わって何とも言いようのない気持ちにさせられた。

この大虐殺事件の詳細は Red Fox の証言に譲るとして、一つだけ挙げておきたいのは、インディアンの発砲というのは、じつは銃の暴発であったことである。しかも、このときにはすでに、騎兵隊側の銃や大砲などの火器の照準が病身の酋長 Big Foot 以下の疲れきったインディアンのテントにびたりと合わされていて (インディアンたちはほとんど丸腰だった)、銃声とともにそれらが一斉に火を吹いた、ということだから、アメリカ軍の意図は明白である。この記述が事実なら (おそらく事実だろう)、いままでのこの事件に関する記述はすべて書き直されねばならない。さすがに Dee Brown は、文献を渉猟しているだけあって、Red Fox が伝えている事実をとり入れている。そして、この事件を扱った最終章を、つぎのようなまことに意味深長な文章で締めくくっているのである。

The wagon loads of wounded Sioux (four men and forty-seven women and children) reached Pine Ridge after dark. Because all available barracks were filled with soldiers, they were left lying in the open wagons in the bitter cold while an inept Army officer searched for shelter. Finally the episcopal mission was opened, the benches taken out, and hay scattered over the rough flooring.

It was the fourth day after Christmas in the Year of our Lord 1890. When the first torn and bleeding bodies were carried into the candlelit church, those who were conscious could see Christmas greenery hanging from the open rafters. Across the channel front above the pulpit was strung a crudely lettered banner: PEACE ON EARTH, GOOD WILL TO MEN.

この結びの言葉は、いままでインディアンに対してなされた歪曲やそれをあたりまえのこととしてうけとってきた風潮に対する怒りではなかるうか。映画『ソルジャー・ブルー』

や『小さな巨人』に見られるように、アメリカ・インディアンを見る眼もすこしずつ変わりはじめているようであるし、また、インディアン自身も、アルカトラス島占拠やメイフラワー号への抗議に現われているように、おとなしいインディアンであることをやめ始めている。こうした動きのなかで本書の持つ意義はまことに大きいのである。

Dee Brown ; *Bury My Heart at Wounded Knee*

(Holt, Rinehart & Winston, Inc., 1971)